

Charles H. Cooley 研究 ——アメリカ社会学史の一節——

小笠原 真

(奈良教育大学社会学教室)

(平成元年4月26日受理)

I 課題の設定

本稿は、アメリカの社会学者のうち、First Big Fourといわれる Lester F. Ward (1841～1913)、William G. Sumner (1840～1910)、Franklin H. Giddings (1855～1931)、そして Albin W. Small (1854～1926)の創成期の社会学者たちに続いて、Edward A. Ross (1866～1951)、George F. Vincent (1864～1941)、George E. Howard (1849～1928)と共に Next Four を形成する Charles H. Cooley (1864～1929)を正面から取り上げ、その社会学の骨子を検討することを企図している。その際、われわれは彼の社会学とりわけ心理学的社会学を完成させたといわれる三部作、すなわち『人間性と社会秩序』(*Human Nature and the Social Order*, 1902)、『社会組織——拡大する意識の研究——』(*Social Organization: a study of the larger mind*, 1909)そして『社会過程』(*Social Process*, 1918)を中心として、その他彼の随筆集『人生と研究者——人間性、社会および学問についての傍る覚書——』(*Life and the Student: roadside notes on human nature, society, and letters*, 1927)、さらには Cooley の死後彼の甥である Robert C. Angell (1899～)によって編集された12の論文と著作目録からなる『社会学理論と社会研究』(*Sociological Theory and Social Research*, 1930)等によって、Cooley 社会学の対象と方法、とりわけ方法論で強調された「同情的内省」(sympathetic introspection)もしくは「同情的参加」(sympathetic participation)をはじめとして、Cooley における「個人と社会」の関係把握や、その背後に潜む彼の抱いた「有機体的歴史観」(organic view of history)、さらには Cooley の心理学的社会学において文字通り彼の名を不朽ならしめた「鏡に映った自我」(looking-glass self)および「第一次集団」(primary group)の両概念の意味内容を検討し、最後に彼の所論に含まれる問題点・疑問点を若干指摘してみたい。

II Cooley の生涯と業績

では、個々の学者の学説を理解する際の常道に従い、Charles H. Cooley の生涯と業績を手短に紹介することから始めよう。

Charles H. Cooley は、父 Thomas M. Cooley (1824～1898)と母 Mary H. Cooley の間の6人きょうだいの4番目として、1864年ミシガン州のアン・アーバー(Ann Arbor)で生を享けた。父はミシガン州高等裁判所判事、ミシガン大学法学部長、州際商業委員会(Interstate Commerce Commission)初代委員長などの経歴の持ち主であった。長じて Charles は1880年16歳でミシガン大学に入ったものの、病弱のため文学士を取得するまでに7年間かかり、ようやく87年23歳で同大学を卒業した。そして、彼はさらに一年間同大学で経営技術の専門家を目指して学んだ。その後、Cooley はベイ・シティ(Bay City)で製図の仕事に従事している間に、経済学でミシガン大

学の大学院修士課程の試験を受ける気持が生じ、再び大学に帰った。けれども、三カ月後に州際商業委員会の仕事でワシントンに行き、約二年間そこで過ごした。その間に依頼されて Cooley が実施した研究成果の一端が、『アメリカ経済学会機関誌』（*Publications of the American Economic Association*, VI, 1891）に発表した彼の最初の論文「路面電車の社会的意義」（*The Social Significance of Street Railways*）や、彼の第2論文である後述する学位請求論文である。

1890年の夏 Cooley は結婚し、91年から92年にかけて冬の六カ月間ヨーロッパを旅し、1892年の秋ミシガン大学に帰って、生涯の教師としてのスタートをきった。すなわち、Cooley は1892年から95年にかけて同大学の政治学科の助手を勤め、その間の94年5月『アメリカ経済学会機関誌』（IX, No 3）に発表した「トランスポーターション——ここでは「交通」と訳出しておくが、「運輸」とか「運送」とかさらには「輸送」とかといった訳語もみられる⁽¹⁾——の理論」（*The Theory of Transportation*）によって、ミシガン大学より社会学を第二主要科目としながら経済学で科学博士を得ている。そして、この学位請求論文は後に Angell によって編集された『社会学理論と社会研究』のなかに再録されたものによると、14章からなる経済学に関する論文とはいえ、すでに随所に Cooley の社会学的な関心が伺われる。一例を挙げれば、彼がその第5章でコミュニケーションの分類を試み、「交通」を物的コミュニケーション（*material communication*）のメカニズムとして捉え、その地点コミュニケーションの範疇に入れているが、同時にコミュニケーションに関する彼独自の社会的見解ともいえる心的コミュニケーション（*psychical communication*）のメカニズムも取り上げているのがそれである⁽²⁾。

その後、Cooley は1899年から1904年にかけては経済学の助教授として活躍し、その間の1902年に世に問うた『人間性と社会秩序』は、Ward によってその原型が与えられ、Giddings および Small によって発展させられてきたアメリカにおける心理学的社会学（*psychological sociology*）の、文字通り Cooley 自身によって完成を目指された三部作のうちの第一作である。それは彼自身の語るところによれば「社会を人間の社会性のなかに存在するものとして考察し、その主要な輪郭を明らかにした⁽³⁾」ものである。そして、その第5章および第6章で Cooley が検討している「社会的自我」（*social self*）別言すれば「鏡に映った自我」（*looking-glass self*）の概念は、彼の名を不朽ならしめたものであって、われわれもV節で改めて取り上げ、その概念の意味内容を詳述してみたい。

1904年以降 Cooley は、ミシガン大学に新たに設置された社会学講座の教授として教育および研究に尽し、死ぬまで同大学に留まった。その間他の大学からの招きもあったが断わり続け全生涯をこの大学に捧げた。なお、彼をして経済学から社会学へ転向させた人に Giddings がいたことは、論文集『社会学理論と社会研究』の第1論文「ミシガンにおける社会学の発展」（*The Development of Sociology at Michigan*）において、Cooley 自身の語る次の言葉によって知ることが出来よう。つまり「社会学の学問的可能性については、私はその科目の領域、その経済学との関係、そしてそれが大学で研究するに適していることを取り扱った1890年頃の Giddings 教授の論文で眼を開いた。……社会学が大学の科目となり、私自身がその教授となることを私に信じさせてくれたのはほかならぬ彼であった⁽⁴⁾」によって知ることが出来よう。こうして社会学に関する本格的な研究を開始した彼は、さきの『人間性と社会秩序』に続く二著、すなわち『社会組織——拡大する意識の研究——』（以下副題を省略し、『社会組織』とのみ記す）および『社会過程』を書き、前書では社会を心理学的に大きな心すなわち「社会心」（*social mind*）として捉えると共に、社会全体の基礎を形成するものとして「第一次集団」の存在を重視し、また、後書では社

会生活の諸過程を解明している。そして、特に Cooley が『社会組織』で創唱した第一次集団の概念は、今日社会学のみならず社会科学においても共有財産の一つとなっているので、われわれもⅥ節で改めて取り上げ、その概念の意味内容を検討してみたい。

なお、Cooley が晩年の1927年に発表した随筆集『人生と研究者——人間性、社会および学問についての傍なる覚書——』（以下副題を省略し、『人生と研究者』とのみ記す）は、彼の学問観わけでも社会学観や人生観、社会観、世界観等を知る上で見逃せない。さらに Cooley の死後、彼の甥である Angell によって編集された『社会学理論と社会研究』は1930年に出版されているが、そのなかに収められている第2論文「交通の理論」は、既述したように彼の学位請求論文であったし、第10論文「一つの研究方法としての小さな諸制度の事例研究」（Case Study of Small Institutions as a Method of Research）や、第11論文「サムナーと方法論」（Sumner and Methodology）等は、彼の社会学方法論を知る上で決して見落とせない論文である⁽⁵⁾。

Ⅲ Cooley 社会学の対象と方法

そこで、いよいよ本題に入っていき、Charles H. Cooley 社会学の対象と方法のうち、まず対象についてみてみよう。

彼はその著『人間性と社会秩序』のある箇所、社会学の対象を「人々が相互に他について抱く想像（imagination）が社会の堅実な事実（solid facts of society）であり、これらの事実を観察し解釈することが社会学の主な目的でなければならない⁽⁶⁾」と解している。けれども、社会は単に想像のみで研究されるべきものでは決してなく、かえって、研究の対象は本来想像的な観念か、あるいはわれわれが想像を想像しなければならぬ精神中の諸概念か、のいずれかの集団であることを知らねばならない。そこで、どんな社会的事実も詳しく把握するためには、われわれは人々が相互について何を考えているかをまず推察する必要がある。例えば、慈善を理解しようとするには、それを施す側と施される側とが相互にどんな観念を抱いているかをまず想像しなければならぬ。また、Cooley は同著の他の箇所ではそれを「人的交通というものは『人間性と社会秩序』のなかで取り扱ったような第一次的な方法と、集団、制度、そして過程というような第二次的な方面とから考察することが出来る。社会学とはこれらの事物の科学であると思う⁽⁷⁾」とも理解している。さらには、彼は『人生と研究者』においては、その第4章で「芸術、科学および社会学」（Art, Science and Sociology）の標題を掲げ、特に「社会学の諸特性」（Traits of Sociology）を記述している箇所、社会学の事実はパーソナリティと人間の変化についてのそれであり、これらはまさに他の諸科学の人々が排除するように教えられているところのものであるから、もし彼らがこの科学を不信の念で眺めなかったとすればかえって奇妙であろう⁽⁸⁾」とも認識している。

このようにみえてくると、結局 Cooley 社会学の対象はいわゆる彼の三部作でそれぞれ取り上げられたテーマ、すなわち、幾分説明を加えれば、『人間性と社会秩序』では個人と社会の関係が個人心理において論究されているし、また『社会組織』では社会が心理学的な大きな心つまり社会心として捉えられると共に、そのなかで人間の進歩をもって人間的同情の不断の拡大と考えた彼の社会哲学が展開されているし、さらには『社会過程』では社会発展の過程と法則を明らかにせんとして、社会生活の諸過程が究明されているが、これらのテーマこそが Cooley 社会学の対象ともみなせよう。けれども、ここではむしろこうしたテーマの背後に潜む「個人と社会との調和原理の追究⁽⁹⁾」こそが、Cooley の最大関心事であり、もちろん彼はこのような仕事こそ社会学

者の使命であると確信していたことはいうまでもない。それ故に、「科学の素材が人間生活を含めば含むほど、ますます人間的文化の幅が研究者の必須条件となってくる¹⁰⁾」といった言葉も彼の口から発せられる。

次いで、Cooley 社会学の方法論的特徴を摘記してみよう。彼は1927年アメリカ社会学会の年次大会での晩餐会の席上発表し、その後 Angell によって編集された『社会学理論と社会研究』の第11章に収められた「Sumner と方法論」において、社会学方法論と調査について、やや長文ではあるが次のように述べている。すなわち、「他の人々と同じく私も最近調査や方法論といったものについて相当考えており、そうした問題に近づく有望な方法が、アメリカ社会学のうみ出した最も成功した調査の仕事は何であったかを問題にすることにある、という気がしてきた。もちろんこの点についての意見は種々分かれるであろうが、しかしよく反省してみると、その問題が純理論的社会学とは違った現実の方法と結果とに関するものであることを、心に留めてもし投票したとするならば、仮に投票者の過半数ではないにしても、多数者は恐らく Sumner の『習俗論』(Folkways) がそうしたものであることに賛成するだろうと思う。私がこの問題を考える時に最も強く私の心を打ったものは、『習俗論』が現在の方法論の規準のどれにも合致していないということである。それは量的な研究でもないし、統計的方法によって行われたものでもない。それは事例研究からなるものでもなければ、精神分析的でもなく、またその名前で呼ばれる派の教養に従えば行動に重点を置くものでもない。というのも、その使っている材料の大部分は同情的想像 (sympathetic imagination) に基礎を置いているからである。さらに、それは大部分がまったく直接的観察の仕事ではない。それは殆どすべて間接的なものである。そして、最後に具合の悪いことにその客観性が問題にされている。Sumner は決して不偏不党な人ではなく、反対に幾分独断的な個人主義と悲観主義とで知られており、そうしたものが彼の習俗の取り扱いに影響しなかったわけではない¹¹⁾」と。

要するに、Cooley にあっては、社会学という社会生活を研究対象とする科学の著しい特徴は、研究者それ自身がその生活の過程の意識的部分であるということである。したがって、その本来の研究法はあくまでも「同情的内省¹²⁾」(sympathetic introspection) もしくは「同情的参加¹³⁾」(sympathetic participation) というものでなければならない、と彼は考えている。そして、Cooley は意識を心的過程と捉えるのではなく、むしろ内容的なものと考え、この意識すなわち精神から社会現象を内面的に把握しようとした。この意味で彼の社会学はドイツの哲学者であった Wilhelm Dilthey (1833~1911) や同国の社会学者であった Max Weber (1864~1920) らの「理解的社会学」(verstehende Soziologie) と揆を一にしている¹⁴⁾。それ故、Cooley の場合逆に統計的方法を唯一の方法だとみなす社会学を「猿真似物理学」(ape physics) だといって¹⁵⁾、社会学における客観的方法を全然認めないわけではなく、ただそれを補助的なものとするのである。なお、Cooley は「事例研究法」(case study method) の重要性を認めるものの一人であることも¹⁶⁾一言付言しておかねばならない。

Ⅳ Cooley における「個人と社会」

前節で記述したように、Charles H. Cooley 社会学の最大関心事は「個人と社会との調和原理の追究」にあるが、特にこのテーマを正面から取り上げた著が『人間性と社会秩序』である。すなわち、彼はこの著の第1章の章題を「社会と個人」(Society and the Individual) としながらも、

『社会と個人』は真にこの著全体を通じる題目であって、単に第1章のみのそれではない¹⁷⁾と断っている程である。それ故、同書の訳者納武津の如きも、「特に『社会と我』てう主題に変わったのは、其の論究する所の主要部分が多くは社会と我との関係如何に帰着し、原著の表題（『人間性と社会秩序』を指す——執筆者注）が時とすると却って迂迴的に感ぜらるるより、一般読者をして本書の内容を一層直截明快に預知せしめようために外ならぬ¹⁸⁾」と記述しているのである。

では、Cooley は「個人と社会」の関係をどのように把握するであろうか。彼は『人間性と社会秩序』のある箇所では、「分離した個人 (separate individual) が経験にとって未知の抽象であると同様に、諸々の個人を離れた社会もまた抽象でなければならない。……換言すれば、『社会』と『個人』とは決して別個の現象をあらわすのではなく、単に同一の事実の集合的および個別的側面に過ぎないものであって、両者間の関係はあたかも軍隊と兵士、学級と学生などの場合のように、全体としての集団とそれを構成する諸成員との関係のようなものにはかならない¹⁹⁾」と主張している。また、Cooley は同著の他の箇所では、「社会としての生活を見い出すところには、どこでも個体としての生活を見い出すことが出来る。そして、このことを逆にいってもまた同様であることはいうまでもない。それ故、社会対個人という対照法 (antithesis) はいやしくもこれを人間関係の一般的もしくは哲学的説明をする時は、いつも無意味で空虚なものであって、これらの二語およびそれらの由来語として互に相対峙せしめようとする人々の心中にいかなる観念がありえようと、ともかくその観念はいわば二個の分離する実体もしくは勢力のそれにほかならないから、このような思想は事実と反するといわねばならない²⁰⁾」とも述べている。

それ故、このようにみえてくると、Cooley は「個人と社会」の関係を従来強調されてきた相対立する二つの見解、つまり「社会名目論」(social nominalism) と「社会实在論」(social realism) のいずれをも拒否していることが判明する (補注1)。

(補注1) それというのも、これらの二種の社会観は次のような意味内容を有しているからである。

まず、社会名目論であるが、これは社会の实在を否定し、社会とは個人の単なる集合体に過ぎないと主張する社会観をいう。そして、このような社会観は16世紀から18世紀にかけて体系的な完成を遂げたといわれる「近代自然法論」(natural law) において、最も明白な形で提唱されている。すなわち、この近代自然法論は人間の自我への目覚めをもたらしたところのヨーロッパにおける市民社会の形成に伴って出てくるが、その代表的な主張者は、イギリスの政治思想家であった Thomas Hobbes (1588~1679) や同国の哲学者であった John Locke (1632~1704) さらにその最後の完成者といわれるフランスの哲学者であった Jean-Jacques Rousseau (1712~1778) などである。そして、彼らの所説をそれぞれ詳細に検討してみると、そこにはかなりの開きを認めぬわけにはいかないが、しかし、その本来の個人主義的な立場から出発して、社会の前に個人があり、全体に先立って部分があると考え、人間は自然法のもとで本来の人格を守るために、相互に契約 (contract) を結び、社会や国家を人為的・計画的に形成するに至ったと考える点では、いずれもほぼ一致した立場を示しているということが出来る。要するに、彼らにとっては、実は個人のみが真の实在であり、おのずから社会や国家は個々人の人為的・契約的な集合にほかならないものとして、いずれかといえば、これに相対的な意義と価値しか認めなかったのである²¹⁾。

次いで、社会实在論であるが、これは社会を単に個人の集合によって成立するのではなく、個人に先立ち社会を超越したそれ自体客観的な統一をもつ实在であるとみなす社会観をいう。そして、こうした社会観の最も典型的なものを、われわれは19世紀前半にあらわれてきた「社会有機体説」(theory of social organism) のなかに求めることが出来る。つまり、この社会有機体説は主として社会学の創始者とみられているフラ

ンスの Auguste Comte (1798～1857) やイギリスの Herbert Spencer (1820～1903) らによって主張されたが、これは発達してきた自然科学特に生物学の影響にもよると思われるが、さきにみた市民社会的な個人主義的原理を提唱する近代自然法論への抵抗が秘められていたとみることが出来る。

具体的には、社会有機体説は一般に社会を生物有機体と類似するものとみて、社会を生物学の原理によって類推しようとする。例えば、Comte は社会学の出発を現実の社会経済の無秩序の混乱をどう処理したらよいかに求めた。このことは Comte をしてフランス革命後の社会的混乱に対する科学的統一と再組織とに向わせた主たる原因である。ここに社会連帯と社会階調とを基礎とする社会有機体説が出発したのである。そして、彼は社会を有機体と考え、社会有機体は最も高等なる有機体であると説くと共に、社会の無秩序の原因を個人の自由と平等とにあるとし、それらを否定するより有機的に階調的な全体社会を考えたのである。それ故、Comte の社会有機体説はさきの近代自然法論の個人的原理への偏向を是正して、全体社会の実在を目覚めさせようとする主張にほかならない²³⁾。

また、Comte と並んで社会有機体説を熱心に展開している Spencer——Cooley は Spencer の『第一原理』(First Principles) の第 2 部に感銘をうけたといっているけれども²³⁾——も、彼独自の進化論に立って、社会と生物有機体との類似を詳述する箇所からは、一見社会の実在を標榜しているかのようにみえるが、他方「社会有機体においては社会的感覚中枢がないから単位の福祉を考慮しない集合体の福祉は求められるべき目的ではない。社会はその成員のために存在し、その成員は社会のために存在しない²⁴⁾」と説くことによって、社会の成員たる個人が分散的で自由であること、したがって、個人が社会のためではなく自己自身のために存在し、ここに社会有機体の超有機体たる理由があることを明らかにしている箇所に接する時、確かに彼は Comte とは違って、社会に対する個人を強調する視座に立っているといえよう。だが、こうした Spencer のような主張は多くの社会有機体説のなかにあってはむしろ例外的であるといえる。それ故、一般的に有機体説は社会をもって全体としてすべてであるとみなし、反面において個人は無であるという結論を提出しているといえる。

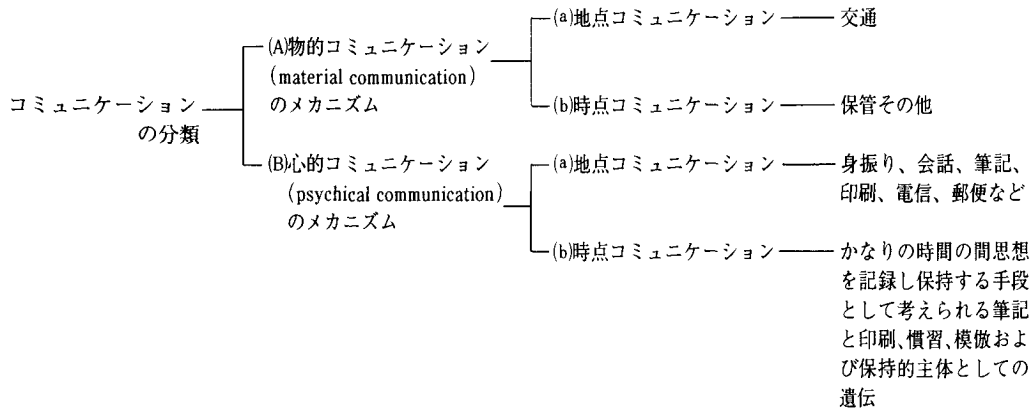
そして、個人に対する社会の優位が存在すると主張する社会有機体的発想は、その後フランスの社会学者であった Émile Durkheim (1858～1917) の「集合表象」(représentation collective) の観念へと、また、オーストリアの社会哲学者であった Othmar Spann (1878～1950) の普遍主義的社会学へと、さらには、アメリカの理論社会学者であった Talcott Parsons (1902～1979) の構造＝機能主義的発想へと、つながっていくのである²⁵⁾。

そこで、Cooley は V 節で詳述する「自我」(ego) が社会に先行するものではなく、逆に社会が自我を決定するものと説き、個人と社会との対照をもって同一過程の両側面をなしている個人化と社会化を抽象的に切り離して、独立的に実体化したところから生じたものと断定し、機能的に両者を一の実体とみる、いわゆる第三の見解ともいえる立場を採用するのである。そして、彼のこの立場は社会名目論および社会実在論の両者を否定した Georg Simmel (1858～1918) や Leopold v. Wiese (1876～1969) のようなドイツの形式社会学 (formale Soziologie) 派の人々を想起せしめる。けれども、彼は一方で社会を機能化しながらも、他方で「もしわれわれが進化的観点を採るならば、社会と個人の関係を有機的關係としてみるように導かれるであろう²⁶⁾」と主張し、それを有機的なものであるとさえいっている。それ故、Cooley がさきにみたような Comte や Spencer に代表される生物学的有機体説を採用する者でないことは明白であるにしても、なお、彼の著作を通じて有機的類推の形而上学的な色彩があらわれているのはそのためであり、また、それは Cooley 社会観の根底に横たわる「有機体的歴史観」(organic view of history) とも大いに

関係しているといえよう。何となれば、彼のいう有機体的歴史観が次のような意味内容を有しているからである。すなわち「有機体的歴史観（私はこれを支持している）は、なにかの要因、またはいくつかの要因が他の要因より根本的だと考えることを否定している。まったくのところ、有機体的歴史観は、身体の一部が動物有機体の生命にあずかっているのと同様に、いわゆる諸要因——精神、多様な制度、物理的環境等々のようなもの——が、それがあずかる生命全体から分離して現実存在することを否定する。この歴史観は精神、物質、土地、気候、植物群、動物群、思想、制度、言語をある一つの完結体の一面、ある総体的発達的一面とみなすのである。これらのうちのある一つに注意を集中するのはよいが、この注意の集中は部分の全体への従属を看過したり、一つのものが他のものに先行すると考えたりする限り、行われるべきでない⁽²⁷⁾」と。

なお、Cooley が「個人と社会」とを一つの有機的統一体として把握する際、両者つまり個人と社会とを媒介するものとして、『人間性と社会秩序』では「同情」(sympathy) もしくは「共感」(communion) ——ただし、第2版以降では初版の「共感」にかわって「理解」(understanding) が用いられている——の概念を提示している。すなわち、これらの用語は日常用いられる「憐み」(pity) とか「優しい情緒」(tender emotion) といった意味ではなく、広義に解されて、他者と交流しようとするあらゆる心的状態の共存を示すものである、と彼自身語っているからである⁽²⁸⁾。ところが、Cooley は『社会組織』では個人と社会の相互作用を可能にするメカニズムとして、むしろコミュニケーションを重視している。すなわち、同書は全体で6部よりなるが、その第2部にコミュニケーションが充てられているのがそれである。つまり、幾分説明を加えれば、彼は「ここでコミュニケーションというのは、それを通して人間関係が存在し、発展するメカニズムが意味されている。すなわち、空間を通して心の象徴を伝達し、時間においてそれを保存する手段と結びつくあらゆる心の象徴にほかならない。それは表情、態度、身振り、声の調子、言葉、文章、印刷、鉄道、電信、電話、そしてその他何であろうと、空間と時間との克服における最近の成果が含まれている⁽²⁹⁾」と述べると共に、人間性にとってのコミュニケーションの機能が不可欠であるばかりでなく、社会にとってもこの機能の存在することこそが不可欠の条件であることも強調している⁽³⁰⁾。そして、彼の同著におけるこのような主張は、彼の学位請求論文ですでに示されたコミュニケーションの分類（補注2）のうち、心的コミュニケーションのメカニズムを詳述しているとも考えられよう。

（補注2） Cooley は学位請求論文「交通の理論」のなかでコミュニケーションの分類を試みている⁽³¹⁾。それを図示すれば次のようである。



V Cooley の心理学的社会学(1)——特に「鏡に映った自我」を中心に——

Charles H. Cooley はアメリカにおいて心理学的社会学を完成させたといわれるが、その学説中特に有名なものは「鏡に映った自我」(補注3)(lookink-glass self)と「第一次集団」である³²⁾。それ故、この節では前者の「鏡に映った自我」なる概念の意味内容を検討し、次節では後者の「第一次集団」の概念の意味内容を検討してみたい。

(補注3) そもそも「自我」(self)の心理学を初めて体系的に取り扱ったのは、アメリカの心理学者であり哲学者でもあった William James (1842~1910) であった。すなわち、彼はその著『心理学原理』(*Principles of Psychology*, Vol. I, 1890)において、自我を「自我感情」(self-feeling)と「自我要求・自我保存」(self-seeking, self-preservation)の行動の二成分に分け、それらはそれぞれ(a)物質我(material self)、(b)社会我(social self)、(c)精神我(spiritual self)、(d)純粹エゴ(pure ego)の四つのクラスを構成しているとした。そして、James の(b)の他人から見られた自分を意味する社会我の概念は、同国の心理学的社会学派の代表者の一人であった James M. Baldwin (1861~1934)の「他我による自我の限定」の考えとなり、また、この節で取り上げている Cooley の「鏡に映った自我」の考えを経て、アメリカの哲学者であり社会心理学者でもあった George H. Mead (1863~1931)の自我・役割論に発展した³³⁾。

さて、アメリカにおける社会心理学の草分け的存在の一人であった George H. Mead も、『アメリカ社会学雑誌』(*The American Journal of Sociology*, Vol., XXXV, No. 5, 1930)に発表した「Cooley のアメリカ社会思想への貢献」(Cooley's Contribution to American Social Thought)という論文で、「Cooley の地位が優越している理由は、彼が自由に自我と他者の発生する二つの側面を同一の意識のなかにおき、自我(self)をもって他者(other)によって自我について抱かれた観念、他者をもって自我によって他者について抱かれた観念とみることによって、他者の自我に対する行為ならびに自我の他者に対するそれは、単に心のなかでの諸観念の各々の相互作用に過ぎないことが判明する³⁴⁾」と記述しているように、Cooley は自我を他者との直接的接触の過程において自己の行動に対する他人の反応と、それによって惹き起こされる自己意識との相互作用の過程から形成されるものとみる。そして、彼がその自我との関連で導き出した「社会的自我」(social self)——Cooley はこれを「反射的自我(reflected self)ともまた「鏡に映った自我」とも称してい

る³⁹——こそは、文字通り彼の名を不朽ならしめたものである。それ故、以下しばらく Cooley の「自我」および「鏡に映った自我」なる観念の意味内容を検討しなければならない。

そこでまず、Cooley はその著『人間性と社会秩序』で自我という語を一人称単数の代名詞「『私』(I)、『私に』(me)、『私の』(my)、『私のもの』(mine)、『私自身』(myself) 等を意味する³⁶」ものと考えている。だが、その同じ彼が同著で「『私に』とか『私のもの』とかあるいは『私自身』などというものは、一般的な生活から離れたものは決してないのであって、かえってそのなかの最も興味ある部分、あるいは一般的と個人的との両者であるという事実そのものから興味がわいて出る一つの部分にはかならない³⁷」とも主張している。また、その後の著書『社会組織』の第1章で、Cooley は「心の社会的および個人的側面」(Social and Individual Aspects of Mind)のテーマを取り上げ、そのなかで「自我と社会とは双生児のようなものであって、われわれは前者も後者も直接的に意識するのである。そして、個々ばらばらの独立したエゴといった観念は一つの幻影に過ぎない³⁸」と記述している。しかも、自我についてのこのような彼の認識は、前節で考察したように「個人と社会」の関連を相互浸透的実在として関連づけ、分析しているところからの当然の帰結であろう。

次いで、Cooley はその自我を最初は「自我の情緒もしくは感情は確かに個人の特殊な活動を刺激し、かつ統一することにおいて重大な機能を果たすために進化した一種の本能とみなしえるのであって、人類の歴史に深く根をおろし、いやしくもわれわれの生活と同様な一切の生活様式には欠くべからざるように思われる。そして、あらゆる人々の誕生と同時におぼろげながらもなおも力強い形で存在³⁹」するものであるとしながらも、やがて「本能的な自我感情は、確かに諸個人の特殊な活動を刺激しかつ統一することにおいて、その主要な機能と関連して進化⁴⁰」するものと把握している。そして、彼が「想像(imagination)は本能的自我感情と協力しつつ、すでに社会的『吾』(social "I")を創造してきた⁴¹」と主張しているように、想像が自我に付加されるに至ると、一段と高級な社会的自我の形成されることが説かれている。したがって、このようにして生じた社会的自我は Cooley にあっては次のように認識されている。すなわち、「社会的自我は心が自己自身のものとして重視している伝達生活から引き出されたある観念(any idea)または種々の観念の体系(system of ideas)にはかならない。自我感情はその重要な領域を一般的な生活の外側ではなく、その内側にもっている⁴²」と。

続いて、Cooley はその社会的自我をさきにも記述したように、「反射的自我」もしくは「鏡に映った自我」とも称している。そして、おのおのはおのおのが鏡であって、通り過ぎる人を反映する。われわれがわれわれの顔や姿や衣装を鏡に写して眺め、それがわれわれのものであるために興味をもち、そして、われわれが期待するものに彼らが応ずる度合に準じて、うれしくもあればまた不愉快でもあるように、想像においてもわれわれは他の人の精神のなかに、われわれの容貌や態度や目的や業績や品格やその他について何らかの思想を認めて、いろいろとそれによって動かされるものである。要するに、Cooley をしていわしめれば、フランスの哲学者であって近世哲学の父といわれた René Descartes (1596~1650) のいう「われ思う故にわれあり」ではなく、むしろ「われわれ思う故に」⁴³ということになる。ところで、われわれの生涯においてそれつまり社会的自我を知り始めるのは、彼が「単に鏡に自分の容貌を写して研究するようになってから後のことであって、すなわち、これは児童が満二歳にもなって自分のさまざまな姿を鏡に写していろいろと観察してからのことでなければならない⁴⁴」と述べているように、二歳頃である。なお、この種の自我つまり鏡に映った自我観念には、Cooley はおよそ三つの主要な要素すなわち「他

人に対しわれわれの容貌の想像と、その容貌に対する彼の判断の想像と、そして誇りまたは恥のようなある種の自己感情⁽⁴⁵⁾」とがあるともいっている。

Ⅵ Cooley の心理学的社会学(2)——特に「第一次集団」を中心に——

「第一次集団」(primary group) の概念は、Charles H. Cooley によってその著『社会組織』で古典的な公式化が行われているので、まずわれわれは彼の説くところを聞いてみよう。

Cooley に従えば、第一次集団の特徴は「親密な face-to-face の結合 (association) および共同 (cooperation)⁽⁴⁶⁾」のうちに見い出される。「それはいろいろの意味で第一次的であるが、個人の社会性 (social nature) と理想 (ideal) との形成にとって根本的意義を有するという意味において第一次的である⁽⁴⁷⁾」。親密な結合の結果は心理学的にいて諸個人を一つの共通した全体のように融け込ませ、そのために集団での共同生活とその目的が個人の自我そのものとなるのである。「恐らくこの全体性をあらわす最も簡単な方法は、それは一つの『われわれ』(a “we”) という表現である⁽⁴⁸⁾」。つまり「それはある種の共感 (sympathy) と相互同一視 (mutual identification) を含むもので、『われわれ』という言葉はその自然の表現である⁽⁴⁹⁾」。彼はこうした結合および共同の最も重要な形式として、家族集団 (family)、児童の遊戯集団 (play-group of children)、近隣集団 (neighborhood) もしくは大人たちの地域集団 (community group of elders) を挙げ、これらはいずれも「人間性と人間理想における普遍的なものの主要な基礎である⁽⁵⁰⁾」と考え、「われわれをめぐる世界における人間性の苗床⁽⁵¹⁾」と呼んでいる。これらの集団は「個人にとってのみでなく、社会制度にとっても生命の源泉である⁽⁵²⁾」が、それを含む包括的な社会がどうあろうとも、ある程度までそれからの独立性を保ち、人間を一定の方向へ形成していく、と Cooley は考えるのである。なお、彼の意味する人間性とは「特に同情を意味するが、また愛、怨恨、野心、虚栄心、英雄崇拜心および社会的な正・不正の共感の加味されている無数の情操をも意味する⁽⁵³⁾」。そしてそれは「すべての社会を通じてある程度まで同一な単純な face-to-face の集団、すなわち家族、遊び場、近隣のような集団のうちで育ち、かつ表現されている性質である⁽⁵⁴⁾」と彼は理解している。

さて、このような考察からも幾分かは明らかなように、Cooley によって提唱された第一次集団の基本的な特質もしくは属性として、従来(1)成員の間にみられる face-to-face の接触 (接触の仕方)、(2)成員の親密な結合および共同 (結合のあり方)、(3)成員 (人間) の社会性と理想とを形成するための根本的な集団 (集団の機能)、の三側面が特に強調されてきたように思われる。そしてわが国では、彼の第一次集団を最もよく性格づける側面として、Cooley 自身が確かに第一次集団を face-to-face group とも呼んでいるところから⁽⁵⁵⁾、それを(1)の成員間にみられる face-to-face の接触 (接触の仕方) に求めている人々が多いけれども⁽⁵⁶⁾、私はそれを(2)の成員の親密な結合および共同 (結合のあり方) に求めてみたい。何となれば、Cooley は成員の face-to-face の結び付きを、別に「人々の打解けた生活」(heart-to-heart life of the people) とも表現しているが⁽⁵⁷⁾、これは彼が第一次集団の特徴を単に「距離」とか「接触」とかいう物理的近接性 (客観的側面) に求めたのではなく、むしろ「顔」とか「面」とかいう概念にまつわる主観的側面に求めたためであろうと考えられるからである。さらに私をしていわしめれば、Cooley にあっては、少なくとも成員の face-to-face の接触は、彼らの親密な結合および共同をうむ条件の一つであると考えられているようである。そして、この成員の親密な結合および共同が人間の

社会性と理想とを形成せしめる働きをする我等感情 (we-feeling) をうむ母体であると考えられているように思われる。

これに対して、「第二次集団」(secondary group) という概念は如何なる意味内容のものであろうか。第二次集団は Cooley 自身にあっては、少なくとも第一次集団のように正面からは取り上げられていないし⁶⁸⁾、また、このような名称もアメリカの社会心理学者であった Ellsworth Faris (1874~1953) も指摘しているように⁶⁹⁾、決して彼の口から発せられたものではない。したがって第二次集団というタームは、後になって他の学者——大橋幸 (1929~) の言によれば⁶⁹⁾、恐らく Kimball Young (1893~1973) ——が第一次集団と対置させるために造り出したものである。

さて、第二次集団は近代的交通・通信技術を前提とする間接的接触 (indirect contact) を重要な条件としているために、成員の間には親密感や全体的な感情もおのずから薄くなる。また第二次集団は「第一次集団よりもはるかに意識的に組織されている事実によって特徴付けられている。その組織は多かれ少なかれ十分に認識された共通の利害関心の存在に基づくものである。これはしばしば『利害関心集団』とも呼ばれている⁶¹⁾」。要するに、第二次集団は本来の目的ではなく他の目的のための手段であり⁶²⁾、この点でイギリス生まれでアメリカの社会学者であった Robert M. MacIver (1882~1970) の「アソシエーション」(association) すなわち類似的関心および共同的関心の一つもしくは若干を共同的に追求するために組織された関心意識的統一体 (interest-conscious unities)⁶³⁾と符合している。そして、第二次集団は時には「派生集団」(derivative group) あるいは「特殊利害関係集団」(special-interested group) とも呼ばれているが⁶⁴⁾、その主要な形式としては国家 (state)、政党 (political party)、職業的集団 (professional association)、大きな官僚的団体 (large bureaucratic corporation) 等が挙げられよう⁶⁵⁾。

なお、第二次集団の特質もしくは属性についても、ここで概括的に述べてみると、さきに挙げた第一次集団の三つの基本的な特徴とは反対のものないしはそれを補足するものである⁶⁶⁾。つまり、第一集団においては成員の接触が face-to-face であるのに対して、第二次集団でのそれは touch-and-go の接触であり⁶⁷⁾、また、第一次集団が成員の親密な結合と共同およびそれに伴う我等感情といった情緒的・感情的側面にその特徴を有するのに反して、第二次集団は成員各自の十分に計算された利害関心によって結び付いた集団である点で合理的・理性的側面にそれを有し⁶⁸⁾、さらには、前者が人間の社会性と理想とを形成するための根本的な集団であるのに対して、後者はかかる点では派生的な集団である⁶⁹⁾、といったように。

ところで、Cooley の第一次集団およびその後対立概念として用いられるようになった第二次集団ないし派生集団の両概念を用いて、集団類型分類を試みる人々に、われわれの管見の範囲でも、Francis S. Chapin (1888~1974)、Robert E. Park (1864~1944) = Ernest W. Burgess (1886~1966)、Theodore M. Newcomb (1903~)、George A. Lundberg (1895~1966)、Jay Rumney (1905~) = Joseph Maier (1911~)、Earle E. Eubank (1887~1945)、Luther L. Bernard (1881~1951) らのアメリカの社会学者や社会心理学者等少なくない (補注 4)。

(補注 4) 具体的には、第一に、さきに挙げた Cooley の第一次集団の特質の第一の側面と符合するが、集団成員の接触の仕方が直接的であるかあるいは間接的であるかという点を強調して、第一次集団と第二次集団の別を設定する立場であって、Chapin、Park=Burgess、Newcomb らが挙げられよう。例えば、ここでは Chapin の説くところを聞いてみると、第一次集団は「親密な接触集団」(intimate contact group) と呼ばれ、

日常直接にしかも頻繁に顔と顔とを合わせる親しい人々の集団を意味するのであって、その典型的なものとして家族、遊戯集団、近隣集団、ギャング集団を挙げている。これに反して、第二次集団は「人為的接触集団」(artificial contact group)とも呼ばれ、そこでは人々は電信・電話、ラジオ、文書などを通じて、間接的にしかも稀にしか接触するに過ぎないところから、極めて非人格的な性格をもつ集団であって、例えば国会、地方議会、理事会のようなものがそれである。なお、Chapinはこの二つのものの中間に位する「中間的集団」(intermediate group)も考え、これを「表面的接触集団」(superficial contact group)とも呼び、学級、キリスト教青年会の地方支部、教会、クラブ等を例示しているが⁷⁰⁾、黒川純一(1901~1985)も指摘しているように⁷¹⁾、いずれにしてもそれが社会的接触の仕方という観点から類別されたものであると考えられる。

第二は、前記の第一次集団の特質の第二の側面と結び付くが、集団構成員の結合のあり方に焦点を合わせて、第一次集団と第二次集団の区別を試みる立場であって、さらにこれには集団成員の結合の量的側面を重視する立場と、その質的側面を強調する立場との別がある。そして、前者の立場を採用する者にLundbergがおり、後者の行き方を支持する人々にRumney=Maierがいる。

すなわち、Lundbergの説くところから聞いてみると、通信手段の著しい発達のみられる以前においては、人々の総体的な相互作用は地理的空間における近接性と不可分な関係にあった。その結果、成員が面接的であるか否か別言するば成員が肉声(human voice)の届く範囲にいるかどうかによって、第一次集団と第二次集団とを分離する傾向があった。しかしながら、今日のようにラジオ、テレビジョンの時代になると、かかる分類規準は明らかに不適當であると彼はまず考えている。次いでLundbergは、従来一般に用いられてきた二分法(dichotomy)による集団分類は極めて不十分なものであると考えられるから、それを採用することをやめて、第一次集団、第二次集団、第三次集団、……といった連続的分類(continuous gradation)を用いることにすると述べている。というのは、彼が集団の本質を成員の相互依存ないしは相互作用であるとみなすことからの自然の成り行きとして、集団分類規準にも成員の実感として抱く相互依存の程度、もしくは成員の間に実際にみられる相互作用の程度が採用されている。ところが彼に従えば、この相互依存ないし相互作用の差異は社会的距離の差異となり、かつ我等感情の差異ともなって顕在化してくると考えられる。かくして社会的距離や我等感情における量(quantitative units)の差異によって、集団分類を試みようとする場合には、やはり連続的分類が最も相応しいとLundbergは考えるからである⁷²⁾。しかしながら、彼のこのような主張にも、遺憾ながら社会的距離や我等感情の量をはかる、いわゆるアメリカの社会学者であるRobert K. Merton(1910~)のいう「標準化された尺度」⁷³⁾(standardized measures)がいまだ用意されていないのである。

これに対して、Rumney=Maierは第一次集団と第二次集団の区別を次のように考えている。すなわち、第一次集団は接触がパーソナルで直接的・親密的・永続的な集団である。第二次集団ではその関係はインパーソナルで間接的・一時的・非親密的である。第二次集団は第一次集団よりも意識的に組織されており、当該集団内の行動は法および世論で統制されている⁷⁴⁾。要するに、彼らは第一次集団での成員の結合の性質を親密的・人格的・情緒的側面に求め、第二次集団でのそれを非親密的・非人格的・合理的側面に求めて、両集団を鋭く対立させるのであり、このような主張は結局Cooleyの見解を基本的に踏襲したものと考えられよう。

第三は、第一の接触の仕方と第二の結合のあり方との両分類規準を併用して、集団の類別を試みる立場であって、Eubankの次のような見解がこれに当たる。つまり彼に従えば、まず集団成員の接触には直接的接触と間接的接触の別があり、前者すなわち直接的接触の優越している集団に第一次集団と第二次集団が、後者つまり間接的接触の支配的な集団として「第三次集団」(tertiary group)が挙げられている。次いで、彼は成員間の親密さの程度(degree of intimacy)に応じて、上述の三種の集団の間を次のように区別している。第一次集団は親密な面接的関係が優越している集団であって、それはその心理的距離の程度によってさらに、

(a)最も深い愛情の絆によって結ばれている家族、(b)家族以外にみられる個人的愛情で結ばれている恋人、親友、(c)熟知関係にある者の間でみられる集団例えば小学校のクラス、近隣集団、ギャングに分けられる。第二次集団は面識がなお個人的ではあるが、その集団構成メンバーの間が親しいとみなせないほど、偶然的・形式的・非常習的 (infrequent) な集団であって、その具体例には職業組織、商業組織、中学校以上のクラス、宗教上の集まり等が挙げられている。第三次集団は個人的面識をまったく欠いたり、極めて僅かしかもたないような集団であって、政党、宗派等が例示されている⁷³。

第四は、さきに挙げた Cooley の第一次集団の第三の特質と結合するが、集団のもつ機能つまり人間の社会性と理想とを形成するための根本的な集団であるか、あるいはかかる点で派生的な集団であるかの点を強調して、第一次集団と第二次集団の別を考える立場であって、この立場は Bernard によって支持されている。すなわち、彼が「第一次集団は個人のパーソナリティや行動が極めて幼少の頃から選択されるところの face-to-face の組織体である。これに反して、派生集団は個々人の面接的接触が支配的な組織体であろうと、あるいはまた間接的接触が支配的なものであろうと、根本的な第一次集団から派生したすべての集団類型を含むのである。この区別はパーソナリティの完成 (personality integration) 過程に第一義的重要性を認めたものである⁷⁴」と記述しているのは、まさしくこの立場を示したものである。

VII Cooley 所論にみられる問題点・疑問点

Charles H. Cooley によって展開されてきた社会学の対象と方法、「個人と社会」の調和原理の追究、鏡に映った自我論、そして第一次集団論について、われわれはこれまで比較的忠実に耳を傾けてきた。だが、彼の所論とりわけ彼の名を不朽ならしめた鏡に映った自我論および第一次集団論に対して、問題点・疑問点を提起した人々が決していないわけではない。それ故最後に、かかる人々の所説についても一瞥を与えて結びに代えよう。

第一点は、すでにV節で登場した George H. Mead の、さきに示したような Cooley の業績を称える一面もあるが、他面では前掲論文や彼の著書『精神・自我・社会』(Mind, Self, and Society, 1934)で Cooley 所論とりわけ彼の自我論に加えた批判には、誠に厳しいものをわれわれは感ぜざるを得ない。何となれば、まず、Cooley は心理生理平行論という「俗流心理学」(ordinary psychology)の立場に立って、宇宙的な進化の流れに生命過程も社会過程も併呑させてしまったため、動物的生物体と社会的な経験とを区別しなくなってしまった、と彼は評している⁷⁵。次いで、Mead は Cooley には科学的方法の適用への関心がなかったし、すべての要素を一元的な生命過程の諸側面として捉えたために、所詮彼は有機体論者だったときめつけている⁷⁶。続いて、Cooley 流の俗流心理学にとっては、すべての社会的相互作用はそこに含まれた個々人の想像力に依存し、社会的経験の過程で彼らが相互に及ぼす直接的で意識的な影響という形で生ずる。それ故、『人間性と社会秩序』にみられる Cooley の俗流心理学は、不可避免的に内省的なものになるし、彼の心理学的方法は完全な独我論の意味合いを伴っている。社会は個人の精神のなかにしか存在しないし、どうみても本質的に社会的であるという自我という概念も想像力の産物だということになってしまう。したがって、問題はこのような精神ないし想像力のなかに、はたして彼自身のいう社会学の対象としての「社会の堅実な事実」が発見され得るかどうかどうかということだ。もちろん Cooley にとってさえ、自我は経験を前提にしているし、経験とはそのなかで自我が発生する過程である。しかし、彼にとってはその過程が外部的で社会的なものというより基本的に内部的で個人的なものだから、Cooley の心理学は客観主義的で自然主義的なというより、主観主

義的で観念論的な形而上学に陥ってしまう⁷⁹。このように Mead は Cooley を論駁しているからである。

第二点は、Cooley、Young 等によって構築された第一次集団と第二次集団の集団類型論に加えられた批判である。すなわち前節ですでに登場した Faris は、『アメリカ社会学雑誌』(Vol. XXXVIII, No. 1, 1932) に発表した「第一次集団——本質と偶然——」(The Primary Group: essence and accident) という論文で、次のように主張している。すなわち、Cooley に従えば face-to-face の接触は第一次集団にとって必要欠くべからざるものであるとみなされ、第一次集団は face-to-face group とも呼ばれているけれども、「第一次集団を規定するに当って、面接的という性質は本質的なものであろうか。すべての面接的集団が第一次集団であろうか⁸⁰」と Faris は問題提起をしている。そして、このような問題提起の根拠として、彼は法廷における裁判官と被告と弁護士とは確かに面接的な関係にはあるが、第一次集団を形成しているとは考えられないからであると主張している。また逆に、Faris は「面接的でない集団が第一次集団としての性格を有していることもありはしないだろうか⁸¹」と問いを發し、「このような問いを考える根拠は十分にある。それは空間的に広く分散している血縁集団は、ただ手紙によって連絡をとるけれども、一体的感情をもち、個々人は全体へのある程度の融合を示し、確かに第一次集団の範疇に入れられるからである⁸²」と述べている。かくして、Faris は成員の空間的接近を必ずしも第一次集団の本質的要素とはみず、それを偶然的要素と考えるのである。さらに、彼は統計的集団ではなく社会学的集団の本質を考える場合には、その成員の体験の内的主観的側面 (inner subjective aspects of experience) から考えるべきである——もっとも、すでにわれわれも VI 節で記述しておいたように、Cooley の所論にはこのような側面も非常にみられるけれども——。客観的・外部的なものをもって集団の本質を考えようとする立場は、行動主義 (behaviorism) 的立場である。そういう立場を採るから Cooley は偶然的要素と本質的要素とを取り違えるのである⁸³、とも Faris は主張している (補注 5)。

(補注 5) アメリカの社会学者である Kingsley Davis (1908～) もその著『人間社会』(Human Society, 1948) において、さきの Faris の所説を支持するかのように、次のような見解を吐露している。すなわち、第一次的結合と第二次的結合の間の真の差異は、集団それ自身にあるのではなく、集団を形成している種々の関係にある、と彼は述べている。また、Cooley に始まる一連の人々の主張は所謂理念型としての集団類型分類のそれであって、第一次的關係 (primary relationship) と第二次的關係 (secondary relationship) とが、現実の第一次集団にもまた第二次集団にも複合的に存在している。しかしながら、第一次的關係が第二次的關係よりも支配的である場合に、われわれは理念型としての第一次集団という名称を、逆に第二次的關係が第一次的關係よりも優越している時には、理念型としての第二次集団の名前を、単に与えているに過ぎないとも Davis は主張している⁸⁴。

そして、彼は第一次的關係の特質として、(1)目的の一致、(2)關係が人格的であること、(3)關係が自然発生的であること、(4)關係が感情的であること、(5)關係が包括的であることの五つを挙げ、また第二次的關係の特質としては、さきの第一次的關係の諸特質と鋭く対立する次の五つを列記している。(1)手段の一致、(2)關係が非人格的であること、(3)關係が契約的であること、(4)關係が合理的であること、(5)關係が特殊的であること⁸⁵。しかも、Davis は第一次的關係および第二次的關係の上記のような諸特質をうみ出す外的ないし物理的条件として、前者に(1)物理的近接性、(2)集団が小規模であること、(3)關係が持続的であることを掲げ、後者には(1)空間的に距離のあること、(2)集団が大規模であること、(3)關係が一時的であることを挙げている⁸⁶。

そして最後に彼は、このような外的ないし物理的条件が伴って必然的に第一次的關係（第一次集團）もしくは第二次的關係（第二次集團）が生まれるのではなく、これはあくまでも一般的な傾向であってももちろん例外もあり得ると結論付けている⁸⁷⁾。

注

- (1) 「トランスポーターション」(transportation)を「交通」と訳出しているのは、早瀬利雄・馬場明男共編『現代アメリカ社会学』(培風館、1954年)における早瀬の論文「アメリカ社会学史概観」(61頁)や、福武直他編『社会学辞典』(有斐閣、1958年)における「クーリー」の項(189～190頁)である。なお、綿貫哲雄「クーリー教授」『社会学雑誌』(日本社会学会、第24号、1926年)では、それに「運輸」の訳語が与えられ(62頁)、また、田野崎昭夫「クーリー社会学の一側面——その人格・思想と初期の傾向——」『中央大学文学部紀要』(中央大学文学部、第22号、1961年)では、「輸送」と訳され(120～131頁)、さらにはH. オードム著、横越英一訳『アメリカ社会学』(法政大学出版会、1955年)では「運送」と訳されている(160頁)。
- (2) Charles H. Cooley, *Sociological Theory and Social Research*, 1930, pp. 40-41.
- (3) Charles H. Cooley, *Social Organization: a study of the larger mind*, 1909, 2nd ed., 1916, preface.
- (4) Cooley, *Sociological Theory and Social Research*, p. 5.
- (5) Cooley の生涯と業績を書くにあたっては、特に Robert C. Angell による *The Two Major Works of Charles H. Cooley*, 1956 の Introduction (pp. V～XIX))、同じく Angell による *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Vol. 3, 1968 における“Cooley, Charles H.”の項(pp. 378～382)、オードム著、横越訳、前掲訳書におけるクーリーを記述した箇所(160～165頁)、さらには田野崎、前掲論文(115～144頁)等を参照した。
- (6) Charles H. Cooley, *Human Nature and the Social Order*, 1902, 2nd ed., 1922, p. 121.
- (7) *Ibid.*, p. 135.
- (8) Charles H. Cooley, *Life and the Student: roadside notes on human nature, society, and letters*, 1927, p. 158.
- (9) C. H. クーリー著、大橋幸・菊池美代志訳『社会組織論』青木書店、1970年における大橋らによる「解説」(347頁)参照。
- (10) Cooley, *Life and the Student*, p. 160.
- (11) Cooley, *Sociological Theory and Social Research*, p. 325.
- (12) Cooley, *Social Organization*, p. 7.
- (13) Charles H. Cooley, *Social Process*, 1918, p. 397.
- (14) 松本潤一郎『社会学論乃学説』弘文堂、1934年、202～203頁参照。
- (15) 早瀬・馬場共編、前掲書、29頁参照。
- (16) Cooley が「事例研究法」を重視しているのは、彼の論文集『社会学理論と社会研究』の第10論文において、「一つの研究法としての小さな諸制度の事例研究(Case Study of Small Institutions as a Method of Research)なる一文を書いている点(pp. 311～322)からも、容易に理解されよう。
- (17) Cooley, *Human Nature and the Social Order*, p. 35.
- (18) C. H. Cooley 著、納武津訳『社会と我』日本評論社、1921年における納の記述する例言。
- (19) Cooley, *Human Nature and the Social Order*, pp. 36-37.
- (20) *Ibid.*, pp. 41-42.
- (21) 黒川純一『改訂社会学要講』時潮社、1952年、8～9頁参照。
- (22) 小笠原真『集團社会学の展開』啓文社、1984年、21頁参照。
- (23) Cooley, *Sociological Theory and Social Research*, pp. 4-5.
- (24) Herbert Spencer, *Principles of Sociology*, 1876, 3rd ed., 1893, Vol. I, pp. 449-450.
- (25) 小笠原、前掲書、21～23頁参照。
- (26) Cooley, *Human Nature and the Social Order*, p. 35.
- (27) Cooley, *Social Organization*, p. 255.

- (28) Cooley, *Human Nature and the Social Order*, p. 136. クーリー著、納訳、前掲訳書、113～114頁。
- (29) Cooley, *Social Organization*, p. 61.
- (30) *Ibid.*, pp. 61-65.
- (31) Cooley, *Sociological Theory and Social Research*, pp. 40-41.
- (32) 例えば、『社会科学大辞典』第5巻（鹿島研究所出版会、1968年）において「クーリー」の項を書いた金沢実（1917～）は、「かれの学説中とくに有名なのは『鏡に映された自我』（looking-glass self）と第一次集団（primary group）である」（246頁）と指摘しているように。また、福武直他編『社会学辞典』（有斐閣、1958年）における「クーリー」の項にも、「彼の学説、とくにその『第一次集団』（primary group）と『鏡に映る自己』（looking-glass self）は広く受け入れられた」（189頁）と指摘されているように。
- (33) 南博『体系社会心理学』光文社、1957年、136頁参照。
- (34) George H. Mead, Cooley's Contribution to American Social Thought, *The American Journal of Sociology*, Vol. XXXV, No. 5, 1930, p. 700.
- (35) Cooley, *Human Nature and the Social Order*, p. 184.
- (36) *Ibid.*, p. 168.
- (37) *Ibid.*, p. 181.
- (38) Cooley, *Social Organization*, p. 5.
- (39) Cooley, *Human Nature and the Social Order*, pp. 170-171.
- (40) *Ibid.*, p. 177.
- (41) *Ibid.*, pp. 198-199.
- (42) *Ibid.*, p. 179.
- (43) Cooley, *Social Organization*, p. 6.
- (44) Cooley, *Human Nature and the Social Order*, p. 99.
- (45) *Ibid.*, p. 184.
- (46) Cooley, *Social Organization*, p. 23.
- (47) *Loc. cit.*
- (48) *Loc. cit.*
- (49) *Loc. cit.*
- (50) *Ibid.*, p. 24.
- (51) *Loc. cit.*
- (52) *Ibid.*, p. 27.
- (53) *Ibid.*, p. 28.
- (54) *Ibid.*, p. 30.
- (55) *Loc. cit.*
- (56) 例えば、東京社会科学研究所編『社会学の基礎』（日本書院、1953年）において、桜井庄太郎（1900～1970）が記述する「社会集団」の項（145頁）、新明正道編『基礎社会学』（誠心書房、1959年）において、谷田部文吉（1923～）が記す「集団の諸形態」の項（148頁）、そして、青井和夫著『社会学原理』（サイエンス社、1987年）において、著者のクーリーにはじまる「第一次集団」と「第二次集団」の別を成員相互の接触の様態によるものと主張している箇所（131頁）など。
- (57) Cooley, *Social Organization*, p. 25.
- (58) Cooley の著作には次のような表現はみられる。すなわち「都市においては、われわれは真に迫ったというよりは、むしろより機能的な個性を見い出す。特殊化された集団（specialized group）の形成にとっては好都合であり、専門的な能力を養うにも好都合である」（Cooley, *Social Organization*, p. 94）とか、「知識の容易な伝達は、孤立より生起する行き当たりばったりの変化から区別されるような合理的・機能的な変動を促進する」（*Ibid.*, p. 95）といったように。したがって Cooley の場合、第一次集団から区別される集団は特殊化された集団であり、それは合理的・機能的な集団であると考えられている。
- (59) Ellsworth Faris, "The Primary Group : essence and accident", *The American Journal of Sociology*, Vol.

XXXVⅢ, No. 1, 1932, p. 42.

- (60) 福武直他編『社会学辞典』（有斐閣、1958年）において、大橋幸が記述する「第一次集団」の項（578～579頁）および「第二次集団」の項（593～594頁）。
- (61) Kimball Young, *Social Psychology: an analysis of social behavior*, 1930, p. 23.
- (62) Michael S. Olmsted, *The Small Group*, 1959, p. 19.
- (63) Robert M. MacIver and Charles H. Page, *Society : an introductory analysis*, 1949, p. 215.
- (64) 大橋が『社会学辞典』で記述する「第二次集団」の項（593～594頁）参照。
- (65) Olmsted, *op. cit.*, p. 19.
- (66) *Ibid.*, p. 18.
- (67) Kingsley Davis, *Human Society*, 1948, p. 302.
- (68) Henry P. Fairchild (ed.), *Dictionary of Sociology*, 1944, p. 135.
- (69) Luther L. Bernard, *An Introduction to Social Psychology*, 1926, p. 411ff.
- (70) Francis S. Chapin, *Contemporary American Institution : a sociological analysis* 1935, p. 162.
- (71) 黒川、前掲書、84～85頁。
- (72) George A. Lundberg, *Foundation of Sociology*, 1939, pp. 310-317.
- (73) Robert K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, 1957, p. 325.
- (74) Jay Rumney=Joseph Maier, *The Science of Society*, 1953.（小口信吉・横飛信昭共訳『社会学』黎明書房、1957年、88～89頁。
- (75) Earle E. Eubank, *The Concepts of Sociology*, 1932, pp. 147-148.
- (76) Bernard, *op. cit.*, pp. 411-412.
- (77) Mead, *op. cit.*, pp. 702-703.
- (78) *Loc. cit.*
- (79) *Ibid.*, pp. 698-706. George H. Mead, *Mind, Self, and Society*, 1934, 11th Impression, 1959, p. 224.（稲葉三千男他訳『精神・自我・社会』青木書房、1973年、239頁。）
- (80) Faris, *op. cit.*, p. 42.
- (81) *Ibid.*, p. 43.
- (82) *Loc. cit.*
- (83) *Ibid.*, pp. 44-45.
- (84) Davis, *op. cit.*, pp. 305-307.
- (85) *Ibid.*, pp. 294-305.
- (86) *Ibid.*, pp. 290-294, 305.
- (87) *Ibid.*, pp. 290-294.

A Study on Charles H. Cooley

——A Chapter to the History of American Sociology——

Shin OGASAWARA

(Department of Sociology, Nara University of Education, Nara 630, Japan)

(Received April 26, 1989)

This paper studies Charles H. Cooley (1864-1929), who is known in the history of American sociology as one of the "Next Four", as distinct from the "First Big Four". In considering the gist of his sociology, I shall focus on his trilogy, *Human Nature and the Social Order* (1902), *Social Organization : a study of the larger mind* (1909) and *Social Process* (1918), which are the works in which he established his sociology, or psychological sociology. I shall also refer to *Life and the Student : roadside notes on human nature, society, and letters* (1927), a collection of his essays, to *Sociological Theory and Social Research* (1930) edited by Cooley's nephew Robert C. Angell (1899-), a posthumous work containing twelve papers and a bibliography. My particular concerns are: "sympathetic introspection" or "sympathetic participation," a concept emphasized in Cooley's ideas on the objects of sociology and on the methodology of sociology in particular ; his ideas on the relationships between individuals and society, and his "organic view of history," which underlies those ideas ; the meaning of the "looking-glass self" and the "primary group", the two concepts Cooley invented, making his name remembered forever. As a conclusion I shall point out some problems and difficulties with his sociology.